

## ■ 書 評



## 「早期精神病の診断と治療」

Henry J. Jackson, Patrick D. McGorry 編

432 頁, 定価 9,450 円

水野雅文, 鈴木道雄, 岩田仲生 監訳

医学書院 東京, 2010年5月

評者は, Klosterkötter, Gross, Huber の 1997 年の論文を, 日本の専門誌で紹介したことがある。この論文では, いまだ顕在発症はしていないが基底症状(統合失調症の特に前駆期, 残遺期に自覚される欠損症状)を持つ患者群の前方視研究が行われていた。著者らは, 基底症状の存在が統合失調症への移行を予想し得る可能性と, それを呈する時期から治療的介入をする意義を, 控え目にはあるが示唆していた。本書の第 6 章は, この論文に立ち並ぶ研究が世界の数拠点で行われ, 知見の量が飛躍的に増大していることを示す。それは現在, 精神病の UHR (ultra high risk) 群を同定する ARMS (at-risk mental state) の研究と呼ばれる。

いささか細部の要約から本書の紹介を開始したが, この ARMS 研究の精神は, 本書を貫いている。本書は, ARMS の同定とそれへの介入, DUP (duration of untreated psychosis 精神病未治療期間) の短縮, 最適な初回エピソード精神病の治療などにより, どれだけ精神病の予後を改善できるかといった問題を, きわめて実証的に扱った書である。

概括を, 紙面の制限のため第 5 部まで紹介する。

第 1 部では, 臨床病期モデルが提唱されている。それは, 主に統合失調症の経過を, 精神病リスクの増加期, 軽度の非特異的な症状と社会機能低下の存在する時期, UHR の時期, 初回エピソード精神病,

不完全回復, 治療抵抗性が生じた場合, 持続する障害が生じた場合の各段階から捉えようとする。第 2 部では, 遺伝子研究, 中間表現型 (エンドフェノタイプ) とエピジェネティクスの研究, 環境危険因子と遺伝要因の相互作用の研究, 精神生理学的研究, 機能的脳画像, 構造的脳画像研究とその意味づけがレビューされている。第 3 部では, ARMS の同定とそれへの介入の正当性の問題が, 現在の研究の限界もふまえて論じられている。ARMS への対応としては, 未介入, 一般的ケースマネジメント, 認知行動療法, リスペリドン, オランザピン, クエチアピン, 炭酸リチウムの少量投与などが候補としてあげられ, これまでの研究知見が示されている。第 4 部では, DUP と予後の関連についての研究がメタ解析され, 病前適応を統制しても DUP と予後に相関が見られることは, 24 カ月までのフォローアップ研究においてほぼ堅固な所見と言えるのではないかと論じられている。第 5 部では, 初回エピソード精神病の治療の実践的指針が述べられている。アドヒアランスの不良な患者の同定, 治療抵抗性と判断された患者へのクロザピンの適応などとともに, 心理社会的治療の重要性にも触れられている。

このように, 本書はきわめて豊富な内容を扱った包括的な書であるが, それでも疑問点はいくつか残る。自分の状態に困惑することなく精神病状態にはいつていくような患者に ARMS を同定するような手法は使えるのか, 初回エピソードの寛解率が高いにもかかわらず再発エピソードの寛解率が格段に落ちていくことを考えるならば, 再発予防にこそ力が注がれるべきなのではないかなどである。しかし本書の密度の濃さは, ここにその一部を示したに過ぎない様々な疑問に対してもこれからのより長期の追跡研究が適切な解答を示していくであろうという期待を抱かせるに十分である。

(津田 均)